その日の風

中村汀女

その日の風

中村汀女

求龍堂

その日の風

初　版　昭和五十四年二月　一〇　日
第二刷　昭和五十四年三月二十四日
定　価　一八〇〇円
著　者　中村汀女
発行者　足立龍太郎
印製本　図書印刷株式会社
発行所　株式会社求龍堂
東京都千代田区紀尾井町三文藝春秋ビル九階
電話〇三―二三九―三三八一
© 1979 Printed in Japan 0095-7902-1328

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その日の風

目次

その日の風

幼稚園行き　13
子猫来る　15
軒すだれ　18
梅の実落つ　21
十年の月日　23
トンネル　26
階段　29
額の汗　31
兼題　34
夜涼　37
観音さま　39

うかうかと　42
長い廊下　45
納涼園　48
その門辺にも　50
花火急　53
孫と写れば　56
生きていく　58
子もりうた　61
涼しき二階　63
はかなさよ　66
通りに出る　68

秋立つ 71
菓子一つ 73
決断 75
アカ帰る 78
母の顔 80
道辺の花 83
草取り 85
私の推理 88
暑くとも 91
水を替える 94
人だより 96
法師蟬 99
羽黒行 102
中上川アキさんのこと 107
孫とは 109
かえりみて 112
寒ざらし粉 122
リュックの重さ 125
鬪草の匂い 127
ほしがる 130
夏柳 132
島の夜 135
台風来 137
花後、赤実 140
朗報も 142

俯く花

安心とは 149
心祝い 151
傘寿の春 153
房州の匂い 155
雪のあと 157
めざわり 159
冬鏡 162
草餅、さくら餅 164
吉屋さんの句 166
俯く花 168
夕日やわらか 170
中洲見ゆ 172
ひけめ 174
鈴の緒 176
生年月日 178
山の土産 180
夕暮れの花 182
おきうと 185
朝の梢 187
梅の実太る 189
紅傘 191
草抜き 193
瀬音雨音 195
インタビュー 197
針持てば 199
来信 201

一句の思い出

枯葦 207
一句の思い出 210
火鉢のかたえ 214
舗道の犬 218
山茶花咲く 220
凹みの道 225
一本榎の記 231
寄せ植 236
来訪者 240
帰国 244
掃き寄せ 247
あとがき
著者近影（日本写真新聞社提供）
掲載誌紙一覧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その日の風

幼稚園行き

タクシーの終始不愛想薄暑かな

タクシー運転手の気のよい人に乗り合わす日はこちらも機嫌がよくなっている。いつかの人は自分はすぐ父親になるのだと、にこにこして私にいった。ちょうど皇居前を通っていたときで、あそこの松の枝ぶりに、私はこの人の生まれるという子供の幸先を祝う心になっていた。ぶあいそうな人に乗り合わせるとこちらはひけめばかり。なんで乗るのか、降りてくれよといわんばかりの運転の仕方のようで、じっと腰かけているのがすまない気になる。

今日は、久しぶりに山手通りを目白の方へ往復したが、ここも聞きしにまさる車の数である。乗用車が相摩してゆくのはそれでもよいが、ぎりぎりに大型の運送車が右に追いつき、トレーラーが左にも迫ると、むうっと暑気熱気が押し寄せるのだった。しかし車たちは、離れつ寄りつ、やはり速度を合わせていると、あたり前のことであろうに、どこまで行っても、いったん伴いはじめた車たちは、いつもかたえにやって来ているのに、私は感心したり、また、いよいよ圧迫を感じたのだった。

私どもの家から例の公害で有名な環状七号線はやや近い。そこに広い道路ができて、昼をあざむく照明灯が立ち並んだ。世田谷の空もこの明るさ、などと喜んだのは束の間である。たちまち喘息の話がひろがった。私も実は喘息の前歴を持っているので、聞き流せない話であった。

私の家も近年、孫たちの声でまったく賑やかに、容赦なくいえばうるさくなってきた。でも孫はかわいくて、少しの菓子もわけてやりたく、寝顔ものぞきたい。上の女児三歳半が、この春から幼稚園に通う。

「七環を渡るのだから気をつけてよ。手を離してはだめよ。」

母親が朝を送って出ようとするのに、私の声が追いかけている。こうしたときに、いわゆる姑の、そして祖母のやかましさ、うるささがあるのかと思うこともあるけれど、やはり心配なことはこちらもいった方がよい。気がすむものである。

「この幼稚園も歩道橋の運動をしたそうですが、も少し下の方に、もひとつの幼稚園や小学校があるのでそちらにできたんですって。」

なにしろ、七環を横切っての幼稚園は必死のようだ。

幼稚園にも日曜の礼拝があるのには、いささか忙しい。そうした習慣のない私が、雨は降

るし遠くからお祈りというわけにいかないかしら、といったところ、若い母親は元気だ。そんなことが、というふうに子供の手を引いてさっさと出かけていった。これもまた安心だ。

その母親の訴えには、私は大声で笑い出した。

「おかあさま、みっちゃんたら〝うるわしき朝も、しずかなる夜も〟の歌を〝くるわしき朝も〟とうたっています。いくら教えても、また、くるわしきといってしまうのです。」

この子の聞き覚え、発音はいまに直るだろうけれど、都会の道路という道路は車が走りまわり、私たちは狂わしく避け逃げて歩く。思いがけない孫の讃美歌が、私の数日来の風邪の熱を吹き飛ばしてくれたようだ。

子猫来る

やみくもに子猫這ひ出し止まらぬも

梅雨近し猫飼ふことでいさかひし

二つとも今日の私の選句の中で見つけたもの。最初の句はふるえる足をふんばって歩く、まだまだ乳ばかりしか飲めぬ子猫。次の句は、もうご飯を食べられるほどに育った、いわば独立できる、そして捨ててあった子猫らしい。「いさかひし」が気にかかる。どうも飼うことが一家の許可にならなかったのではあるまいか。こういう句に出会うと、私もまたついに、猫とともに暮らしそめたことが、ちょっと気楽になる仲間を得た感じである。

ひところ、七匹もいたシャム猫が、ついに先々月最後の一匹が死んだ。涙を流して葬ったが、二十年来、はじめて猫のいない家の内は、ちっとも気がかりがない。第一、外で猫の騒ぐ声がしても、私がそちらに出かけ、制止する必要がなくなった。夜中に争う声がしても、わが家の猫の名を、大声で呼びたてないですむのだった。

お手伝いさんは雨の日の縁側の足あとをこぼさなくなり、猫の居ぬことの安らかさに馴れていたのに、まったく今日のできごとである。離れの嫁が絶叫して廊下を飛び出し、そのあとに二歳の女児が、これは母親の悲鳴におびえて、これまた手のつけられぬ泣き声に、私が駆けつけたら、なんのこと、流し口から子鼠が顔を出したという。

「いいえ、こちらの台所にも出るらしいのです。コトコトと音がしてます」と、お手伝いさんもいう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com